
氷天の波導騎士

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷天の波導騎士

【Nコード】

N9097Z

【作者名】

ぱっつあん

【あらすじ】

異世界で勇者やって魔王を倒した……なんて言っただけが信じてくれるだろう。きっと誰も信じてはくれないに違いない。それでも俺こと「冬道かしぎ」は、異世界に召喚されて魔王を倒して、元の世界に還ってきた。そして普通の生活を取り戻した。そんなある日、俺は「超能力」なんてものに出会ってしまった。これは異世界で勇者と呼ばれた俺が、超能力者と関わっていく物語である。

1 1 「元勇者」(前書き)

最初のうちはわからない単語が出てくると思いますが、話が進むにつれて説明していきますのでご了承ください。

1 1 「元勇者」

「氷姫よ」

冷気が男を中心に竜巻のように渦巻く。

あまりの勢いに辺りが凍結していき、その中心に男は立つ。

真紅の瞳の瞳孔は縦に切り裂かれ、口元には獯猛な獣のような冷酷な笑みが浮かんでいる。

「天焦がす地獄の花束を！」

ただ渦を巻くだけだった冷気は、明確な狂気を持って男の視線の直線上にいる女を捉えた。

女は右手をゆるりと前へとかざす。

どこのものとも分からない文字が刻まれた巨大な薄紫の円形

魔方陣が展開され、男の放った氷花を防ぐ。

氷花は魔方陣に触れた瞬間、鼓膜が破れかねない音を立ててどんどんと碎け散っていく。

それはさながら花卉が散っていく花のようだ。

そしてそれは、女の視界を遮ることを目的としたような波導の使い方だった。否、それを目的としていた。

男は前傾の姿勢で走り出す。

着流しを走る勢いでなびかせ、両手で剣の柄を軽く握る。

その古風な男の見かけとは正反対に、騎士のような気高さを感じさせる剣の刀身からは、蒼白い波動がなぞるように放出されている。走る勢いを一切殺すことなく脚部に集中させ、人間とは思えないほどの距離と高さを飛躍する。

まだ剣の柄は握らない。

視界を遮る役割を果たしていた氷花は完全に消え去り、男の真紅の瞳と女の深紅の瞳がぶつかり合う。

「くたばれ、魔王オオオオオオッ！」

男……勇者となったその男は吼えた。

ついに勇者は剣の柄を強く握りしめた。剣を振り上げ、まるで泉から湧き出るように体内から溢れる波動を刃に乗せ、一気に振り下ろした。

女……魔王は左手を剣の軌道にかざす。再び魔方陣が展開され、勇者が振り下ろした剣を防ぐ。

瞬間、勇者の持つ剣の刀身が一瞬にして風化して、消滅した。

勢いを止めることができない体はそのまま魔王へと向かうが、それは片手で殴るように軽くあしらわれる。

「嘗められたものね。正面から私を崩せるとでも思っているのかしら？ 刃は砕けたわ。どうするつもりなのかしらね」

「……刃なら、まだここにある！」

首から下げた金の首飾りの鎖を無造作に引きちぎり、それを復元した。

先ほどの剣よりも神々しく、何よりも気高い『天剣』を片手に構え走り出した。

同時に魔王の背後から今までとは比べ物にならないほど巨大で、ミルクよりも濃厚な魔力を秘めた魔方陣が展開された。

いくつにも重ねられたように見える魔方陣。そのひとつひとつから薄紫の、魔力が大量に込められた弾丸が勇者に迫る。

しかしそれをものともしない。

刃で切り裂き、ただまっすぐに魔王へと駆ける。

「じゃあな。お前の大好きな　　終焉だ！」

『天剣』の刃が、魔王へと突き立てられた。

「あー……世界滅ばねえかな……。むしろ滅びろ……」

全てを包み込むような青空。ふわふわと浮かぶ雲を見上げながら、俺、冬道ユキナヒかしぎは呟いた。

どうしようもなく平和な世界。

目に見える争いはほとんどないのに、見えない場所の争いは指で数えても数えきれない。

そういうのはどうでもいいんだ。

目に見える争い、それも『戦い』って呼べるくらいの争いをした
い。

不意に空を見上げる俺の視界が、純白に隠される。

「元勇者のくせに、何を物騒なことを言ってるのですか」
純白を凝視する。

ヒラヒラのレースが取り付けられた純白のそれ。

思考にしてそれが何であるか気づくまで一秒もかからない。

「……狙ってんのか？ そうやってパンツ見せんの？」

「……見ましたね？」

「見せてるんじゃないんだ？」

制服のスカートの端を押さえ、顔をわずかに顔を赤にさせる藍霧
真宵後輩。

腰の辺りまで伸ばされた黒曜石のような髪を、サイドテールに纏めて
ている。高校一年にしては小柄な体をさらに小さくして俺を睨んで
いる。

可愛いというより凜としているという顔立ちなのにこの行動のギャ
ップが、この私立桃園高校で人気を集めている要因に違いない。

もつとも、俺はそんなのには微塵も興味はない。

「だいたいよお、お前のパンツなんか見飽きたつての。あつちで何
回見せられたと思つてんだよ」

「別に見せたかったわけじゃありません。なんですか、そうやって
あたかも私が見せたような言い方をして」

「動くつて分かつてんのにあんなヒラヒラした格好してたんじゃない、
そうとられても仕方ねえんじゃない？」

「かしぎ先輩がちゃんと動かないからです。なんで後衛の私が前に
出ないといけない状況になるんですか」

「うつせえな。怪我してねえだけマシだろ？」

「ごろりと寝返りをうち、わずかに頬を膨らましている真宵後輩を視界からはずす。」

「ちやーんと、俺はお前を護ってたろ？」

「む。確かにそうですけど……」

すねたような声が後ろから聞こえる。

「ただまあ、あんときは悪かったと思ってるよ」

「かしぎ先輩……」

「お前のパンツ見たさにわざと手加減して戦ってたからな。調子乗りすぎて俺も怪我したし」

「やっぱりわざとだったんですねっ！ だと思いましたよ。先輩がそう簡単に後ろに通すとは思えませんから」

「妙な信頼寄せられてんのな、俺」

いたずらっぽく告げると、また後ろから「むむむ……」なんていうすねたような声が聞こえた。

前々から思ってたけど、こいつって面白いよな。

真面目だから正反対の俺と妙にかみあう。こうやって、からかってみると楽しいし。

「……で、真宵後輩はいつたいこんな場所で、何をやってるんだ？」

「そういう先輩こそ、不良みたいな真似をして屋上に寝てるなんて、何をやってるんだと訊かれてもおかしくはありませんが？」

「俺はいいんだよ。還ってくる前からだからな」

「答えになつてませんけど」

真宵後輩はそう言いながら、俺の隣に座ってきた。

俺と話すために来たのかどうかと訊かれたら、間違いなく違うと答えるだろう。

別に、真宵後輩は俺と話したいから座ったんじゃない。

この場所が好きだから座っただけなんだ。

俺も、ここに真宵後輩よりもあとから来たとしても、今やっていくように寝転がって空を見上げてたはずだ。

「別に理由なんてない。ただ、来たかったから来ただけだ」

「奇遇ですね。私もです」

「いいのかよ。一学年で成績トップのお前が、こんな場所でサボっててもよ」

「どうなんでしょうね」

「俺に訊くな」

答えられるわけないだと付けたし俺は、ただぼんやりと空を眺めた。

特に真宵後輩と会話があるわけじゃないが別に、気まずいとかいう雰囲気があるわけじゃない。

認めるのは非常に癪に障るが、こいつが黙って隣にいただけで、安心できる。心が安らぐ。落ち着いて、ぼんやり出来る。

緩やかにふく風が真宵後輩の髪を揺らし、シャンプーらしきいい匂いが鼻をくすぐる。

こいつも同じようなことを思っているかは分からないが、少なくとも、俺はこいつがいるだけで安心することができる。

青い空。白い雲。桜の花びら。

平和だ。とても平和だ。

これが当たり前だった頃は、何も思わなかった。

だけど、この当たり前前が当たり前前じゃないところを見てしまったから、この当たり前前がとても幸せのように感じる事が出来る。

でもそれと同時に、抱かずにはいられないものもある。

「……暇、ですね」

唐突に、真宵後輩は呟いた。

「ああ、暇だな。ホントに退屈だ。思わずあくびが出ちまうくらいにな」

「なんだか未だに実感がありません。還ってきたという実感が」

「これまた奇遇なこともあるもんだ。俺もだ。なんだか、夢でも見てるんじゃないかと思う」

暇、なんていう表現の仕方をしていいなら、俺たちは凄く暇だ。

何か明確な目的があつて、ただそれに向かつて突つ走ることな
ければ、誰かに襲われることを警戒する必要もない。

ぼんやりとしてても何も起こらない。せいぜい、サボっていたこ
とを見つかつて叱られる程度だ。

俺たちはそんな当たり前な日常が暇なんだと思う。

「一度高みを見てしまうと、それより低いところはつまらなく思え
る。そんな感じでしょうね」

「高み、ねえ。言いようによつちや、確かに高みなんだろうよ」
でも、と言葉を紡ぐ。

「こいつは高みとかそういうのじゃなくて、刺激が足りないってだ
けなんだよな」

「認めたくはありませんが、そうなんでしょうね」

どことなく寂しさを感じさせるような口調で、真宵後輩は同意し
てきた。

俺の目に見える真宵後輩の背中も、寂しそうに見える。

「あれだけ還りたい還りたいって言つてたお前が、還つてきたら来
たでそんなこと言うなんて思わなかつたぜ」

「私だつて、こんな風に思うだなんて思いませんでした」

最初の頃はあんなに還りたがつてたのに、最後には還るのを迷つ
てたくらいだからな。

やっぱり五年間もいれば、それなりに愛着も湧いてくるってこと
か。

「別にこの日常に不満があるわけじゃありませんけど、なんだか、
つまらないです……」

「子供みたいな言い分だな。まあ、それを感じてんのは、俺も一緒
なんだよな」

「……つまらないですね、かしぎ先輩」
「そうだな、真宵後輩」

とりあえず名前を呼びあつてみる。

特に意味はないけど。

こんなものじゃ暇潰しにもなりやしない。
流れていく雲を目で追いながら、俺は言う。

「この日常をつまらないなんて思うのは人生に絶望を感じてる廃人か、俺たちくらいのもんだろうよ」

「廃人と同列に扱わないでください」

「気にすんなよバカ。普通に暮らす普通の奴らは、この普通の日常で普通に満足できる。でも、俺たちは違っちまったわけだ」

きっかけは些細な偶然だったのかもしれない。

選ばれたのが俺や真宵後輩じゃなかったら、今こうしてこんな会話をしたこともなかっただろうし、する必要もなかった。

ほんのちよつとの偶然が、住む世界を一八〇度変えてしまったんだ。

「こんな体験した人間なんて、全人類探しても俺たち二人くらいだ。俺たちは、ちよつとばかり普通から離れちまったのさ」

「どうして、私たちだったんでしょね」

「さあな。意味なんてなかったんじゃないか？」

俺たちはこのちよつとの偶然から、偶然出会った。

それまでは接点なんかなかったし、俺は真宵後輩を知ってても、あつちからしたら分からない。

その程度の、関係と呼べるかすら分からない関係だった。

どうしてこの二人だったかなんて、偶然としか言いようがない。

「ただ呼ばれて、知り合って、今こうして話をしてるなんてのは全部が全部、偶然なんだ」

「偶然、ですか」

「そう、偶然。俺とお前が人間で、この場所で出会えたくらいのな。そんな確率の偶然が、俺たちを巻き込んだ」

こんな偶然があったから、俺たちは知り合えた。

話すような関係になった。

お互いを知らなかったはずの俺たちが背中を預けあって戦ったり、手を取り合って目的に向かうことになった。

そんな全ては、ただの偶然。

「あつちの皆は、元気にしてるでしょうか？」

「分かんねえ。あつちから喚ばれでもしなかったら、俺たちはあつちに行けねえからな。気にしなくても、あいつらなら元気にしてるだろ」

バカだからな、と呟くと真宵後輩に笑われた。

なんだよ。笑うことないだろ。

「離れてても心は繋がってる……そう言ったのはどこのどいつだよ。全然繋がってねえじゃん」

「悪かったですね」

「嘘だよ。すねんなバカ」

「すねてません」

嘘だろと思っただけど、あえて口にはしない。

口にするようなことでもないし、旅をしてるなかで真宵後輩がこっとなつたらすねてるってのは学習済みだ。

「チトルは女の尻でも追っかけてんじゃね？」

「有り得ますね。というか、それしか有り得ないでしょうね」

女の子が大好きで、モテるために仲間になった狙撃手を思い浮かべる。

ただの色ボケ野郎かと思ってたけど、あいつの狙撃の腕は超一流だったっけな。

「ジエイドは先輩に勝てるようにと、今ごろ鍛錬尽くでしょうね」

「しつこいからな、あいつも。どうせ俺には勝てないってのに」

俺の好敵手ライバルと呼べるような強き死神を思い浮かべ、苦笑するしかなかった。

あいつがいたから、俺も強くなることが出来た。

やっぱり好敵手ライバルって大切だよな。

「エーシエは最後まで還らないでって泣いていましたが、泣き止んだでしょうか？」

「さすがに泣き止んだろ……」

とても仲間思いで、何よりも仲間を大切にする少女がいた。そいつは最後、俺たちが還るときにはわんわん泣いていて、なだめるのが大変だった。

あつちで一番最初に仲間になって、一番長く旅をしてただけあって、別れるのが辛かったのを覚えている。

でも最後は、俺たちを笑って見送ってくれた。

「皇女様にあんなに感謝されて、むず痒かったですね」

「感謝されることに慣れてねえからな」

俺たちを呼び出した皇女様。

あの人がいたから、全ての偶然は始まった。

他にもたくさんの人々と関わってきた。助け合ったり笑いあったり、ぶつかったり。関わり方は色々だけど、確かに俺たちはあそこ

にいたんだ。

「いつかまた、会える日が来るといいな」

「今度は私たちの日常を見せてあげたいですね」

「あいつらが見ても面白くないと思っぜ？」

「いいえ。きつと喜びますよ」

「そうだといいけどな」

上半身を起こして、風をその身に受ける。

やっぱり、俺たちは還ってきたんだよ。俺たちがあるべき日常の世界に。

それでも、あつちでの五年間は、目を瞑れば昨日のことのように思い出すことが出来る。

今まで生きてきたなかで、もっとも楽しくて過酷な五年間。

たくさん仲間と思いついた五年間でもある。

「元勇者、か。そんな称号、こつちじゃなんの意味もないんだよな」

「そうですね。そんな肩書きがあっても、進路には意味がないですから」

「だけど、こつちは意味はあるよな」

言いながら、俺は制服のポケットから金色の水晶の首飾りを取り

出して、真宵後輩に見せる。

「……持ってきたんですか？」
『天剣』^{てんけん} はあつちの伝説の剣なんですよ？」

「伝説の剣だろうとなんだらうと、勇者専用の武器なんだから俺がもらうのは当然だろ？」

勇者専用の武器を、他の奴が使えるわけじゃないんだし、俺が持ってた方がいいに決まってる。

それに、俺だけにそれを言うのは筋違いだ。

俺は真宵後輩の首から下がる首飾りを指差す。

「お前だつて『地杖』^{ちじょう} 持ってきてんじゃねえかよ」

「……こ、これは私専用なんですから私が持つてて当然です」

「ほれ見ろ。第一に、あの皇女様が何も言つてなかつたんだから大丈夫だつて」

今さら言つたつて『天剣』も『地杖』もこつちに持つてきてしまったんだ。仕方がないし、持つてくるのは当然の権利だ。

またこの二つが必要になったら、きつとあの皇女様は俺たちを喚びだしてくれるに違いない。

だからこそ、俺たちが持つてる必要がある。

「あつちの話をしてたら、きりがないですね」

「話題が尽きなくていいじゃんか。楽しいし」

「ふふつ。かしぎ先輩らしいですね」

口元を押さえて楽しそうに、真宵後輩は笑う。

あつちの話をしてると、話題が尽きなくて楽しいな。

冬道かしぎと藍霧真宵。異世界に召喚され、勇者として剣と杖をとつた二人。

そんな俺たち二人は今、召喚された目的を果たして、還ってきたんだ。

勇者の証である『天剣』と『地杖』を持つて、俺たちの世界に。

もうあんなことには巻き込まれはしないだろうけど、その経験はちゃんと思い出に刻まれている。

だから今日も、俺と真宵後輩は授業をサボって異世界について語り合う。

1 2 「普通の日常」

私立桃園高校に通う俺こと冬道かしぎは、後輩の藍霧真宵と共に異世界に召喚された経歴を持っている。

何の前触れもなく、接点のない俺たちは、同じ場所に喚び出された。

淡い光に包まれたと思えば、次の瞬間に目の前に広がっていた光景には、あときは驚かされた。

中世の欧州ヨーロッパの城みたいな場所に、俺たちはいたんだ。

目の前には褐色で容姿端麗な美女がいて、その人がヴォルツタイン王国の皇女様だったわけだ。

正直なところ、わけが分からなかった。

いきなり光に包まれたと思えば、見知らない場所に、学校のアイドル的な扱いを受ける後輩がいたんだ。

こんな状況をすんなり理解できる奴がいたらぜひとも会ってみたい。

……ああ、隣にいたっけな。全然動じなくて、無口無表情で皇女様に状況説明を促した後輩が。

何とか気を取り直した俺たちは 真宵後輩は最初から冷静だったが 皇女様からこの状況の説明を受けた。

俺たちは二人は、復活した魔王を倒してもらうために、異世界から召喚された。

簡単かつ明確に説明したらこんな感じだ。

皇女様がお決まりの能書きをべらべら話してたが、そんなのは聞き流してた。意味なんてなかったし。

問題になるのは、俺たちみたいな平和な世界から召喚した二人で、魔王を倒せってことだ。

精鋭部隊やら何やらが束になって戦って負けたのに、なんで俺た

ちに世界の命運をかけるのか。

しかも魔王を倒さないと元の世界に帰れないなんても言われて、いきなり宿題を押し付けられたみたいだった。

もちろんそんなことが出来るわけないのに、戦うことなんか出来ないのに、俺たちは可能性を示してしまった。

魔王を倒すことが出来る伝説の武器である『天剣』と『地杖』を、俺たちは使ってしまったんだ。

ただがむしやらに、自分の身を守るために剣と杖をとった俺たちは、その瞬間に唯一、魔王を倒せる存在になった。

あのときは、魔王を倒せるなんて思ってたが、今こうして生きてるってことが倒せた証明になってるんだよな。

魔王に止めをさしたこの『天剣』も、それを最後に使っていない。使うような場面がないって言った方が正しいな。

魔王を倒したあとは国を上げて祝杯をあげて、お祭り騒ぎに便乗して、こっちの世界に還ってきた。

剣をとるような場面は、あれからはない。

そんな場面に出会うなんて、もうないんだと思う。

平和で『戦い』のないこの世界で、剣をとる必要なんてないから。あのときは剣なんかいらさない、元の世界に還れるだけでいいだなんて言ってたが、今ではなんだかそれが寂しく感じる。

五年間、俺は『天剣』を手にして戦ってきた。

でも、還ってきたらそれはたったの五時間程度のことではなかった。

生き残るために鍛えた肉体も、死にかけるような怪我を負った傷も、五年間で成長した身長も、還ってきたら元通りになってた。

夢かと思っただが、やっぱり夢じゃない。俺の手には、五年間を共に過ごした『天剣』があつたから。

元勇者、確かにその通り。

今の俺は『天剣』を持つてるちょっと普通とは違う高校生だからな。

そんな俺は、今、普通の生活を送っている。

「兄ちゃん、朝だから早く起きな……って、もう起きてたのかよ」
俺の部屋のドアを開けて入ってきたのは、妹の冬道つみね。

栗色の髪をショートカットにして、俺とはあんまり似てない勝ち気な表情をしている。

中学三年生にしては、大人びてる容姿は人気を集めているらしい。

「なんだ。俺が起きてたらおかしいのか？」

「前までだったら早起きなんかしてなかったから言っただけ」

「そうかい。んじゃ、さつさと朝飯でも食って学校に行くと思いますか」

「兄ちゃんが学校行ってもサボるだけじゃないの？」

「うっせえ。別にいいんだよ」

俺はつみねと会話しながら、リビングに向かうために階段を降りる。

廊下を曲がり、ドアを開ける。

目の前に広がる光景は、最近ようやく慣れてきた我が家のリビングだ。

テーブルにソファ、テレビと一般家庭にありふれた家具があるだけで、特に変わった物は置かれていない。

「もう朝飯出来てるから、さつさと片付けて」

「兄に対する言葉遣いじゃない気が……」

「いいじゃん。兄妹なんてこんな感じじゃない？」

イスに座りながら、つみねは言ってくる。

いい匂いが鼻をくすぐる。テーブルの上に用意された朝飯から漂うものだ。

味噌汁に魚、納豆とまさに日本人食だ。

「でも、兄ちゃんが朝飯の注文してくるなんて思わなかったよ」

「むぐ？ ……別に朝飯の注文くらいしたっておかしくねえだろ。」

俺だって人間だぜ？」

未だに懐かしいと感じる日本人食を口にしながら、俺は間違っ

ことを言う。

それにしても、つみれの飯は相変わらず美味しいな。

「確かにそうだけども、この前まで飯なんか適当でいいって言うってたし、食べないときもあったからさ」

それに、と言葉を区切る。

「前までなんか取りつく島もないって感じだったし。いきなり朝飯の注文してきたときなんか、別人かと思ったよ」

「心境の変化って奴だ。そういうときもある」

「ふーん。心境の変化、ねえ……」

疑いの眼差しを向けてくるつみれに苦笑しながら、黙々と朝飯を進めていく。

形のいい眉を歪めながら、つみれは箸をくわえて俺に何があったのかを考えてるってところだろうか。

ヴォルツタイン王国に召喚される前は、確かに取りつく島もないって感じだった。不良まではいかないものの、問題児くらいには映ってたと思う。

何かを思いついたのか、くわえてた箸を俺に突きつけながら、微妙に核心をついてくる。

「分かった。あの最近一緒にいる黒髪の人でしょ？」

「そうだと言えば、そうなるが、そこまで関係はしてねえ。いや、関係してるかな……」

「どっちだよ……あむ」

どっちだよって訊かれても、真宵後輩とは旅を一緒にしたってだけで、心境の変化までには関係してない……はず。

ヴォルツタイン王国に召喚されて、旅に出て、一緒に戦って、魔王を倒した。

そうやって考えてみると、俺の後ろにはいつも真宵後輩がいた。

真宵後輩が後衛でサポートしてくれてたから、俺は安心して戦うことが出来た。

『天剣』なんていう伝説の剣を持ってても、戦い方は素人なんだ。

背中を預けられる人がいたから、こういった心境の変化があったのかもしれない。

認めるのは癩だが、たぶん、真宵後輩のせいだな。

「その首飾りもその人から貰ったんだろ？」

「あ？　なんでそうなんだよ」

「だって、あの人もおんなじのつけてたし。兄ちゃんは金、あの人は銀。形はちよつと違ってたけどさ、おんなじ物だろ？」

「お前、よく見てんのな……むぐ」

俺たちがお互いに『天剣』と『地杖』を持ち帰ってきてたのを知つたのは、還ってきてから三日が過ぎた頃だ。

それからは首にかけてるって言っても、ただか十日程度。

つみれは真宵後輩とほとんど会ってないのに、よくそんなところまで見れたもんだよ。

「そう言うのって目に入るもんじゃない？」

「俺には入らんけどな」

「兄ちゃんはそういうのは無頓着だからだって。そんな兄ちゃんが首飾りなんてやるわけないじゃん。やっぱりそれ、あの人に貰ったんだろ」

「違つての。同じものつてのはあつてるけどな……むぐ」

「じゃあ、選んでもらったとか？」

朝飯に手をつけることも忘れて、つみれは俺に質問攻めをしてくる。

「ここ最近、朝はこの話題ばかりだよな。」

目がキラキラしてて、興味津々なのが嫌ってほど伝わってくる。

「……なんでそんなに気になんだよ。別におかしくないだろ？　俺、

一応高二だぞ？　オシャレのひとつでもやるって」

「なんで気になるって訊かれたら、あたしが兄ちゃんの妹だからさ」

……意味が分からん。なんで妹だから真宵後輩のことが気になるんだよ。

「将来のお義姉さんになるかもしれない人のことを知りたいって、

当然の感情だと思うけど？」

「恋人にもなつてねえのに、嫁になる予定なのか」

「まだ恋人じゃないの！？ 毎朝迎えにくるのに！？」

両手をテーブルに叩きつけて立ち上がりながら、つみれは驚いた声を上げていた。

そこまで驚くようなことでもないと思うんだけどな。

「毎朝迎えに来るからって恋人とは限らねえだろ？」

「だって幼馴染みでもないのに毎朝だよ！？ 普通に考えたら恋人だとか思うだろ！？」

「そんなもんか？ 家が近いから来るとかじゃね？」

「家が近いからって普通は来ないって。はあ……兄ちゃんって、もしかして鈍感なのか？」

「さあね。……ごちそうさま」

俺は両手を合わせて、会話を終わらせるように朝飯を終わらせる。あつちじゃ鈍感だなんて言われたことはなかったけどな。

だいたい、あいつが俺のことを好きだとか、そういう感情を抱いてるはずがない。

俺もそうであるように、ただ単に一緒にいたいだけなんだよ。

「あつ、逃げんなよ兄ちゃん！」

「分かった分かった。早く朝飯を片せって言ったのはお前だろ？ お前も早くしないと遅刻するぞ」

「む。明日は絶対聞き出す！」

妙に意気込んでいるつみれは、朝飯を口の中にかき込んでいく。

聞き出すなんて言われても、これが俺と真宵後輩の関係だし、異世界に召喚されて一緒に戦ったなんて言っても信じられるはずがない。

ただ、恋人なんてのよりは深い関係を築き上げてしまったとは言える。

ブレザーを羽織り、鞆を持って準備完了。

すると、まるでタイミングを見計らったかのようにチャイムが家

の中に響き渡った。

「タイミング、バッチリだよな。どっかから見張られてる？」

「んなわけねえだろ」

とは一概には言えない。

あいつのことだから、見張りなんてのは意外にやりかねないんだよ。

俺はつみれに「遅刻すんなよ」と一言だけ伝えようと、急いで玄関に向かう。ドアを開けて、外に出る。

「おはようございます、かしぎ先輩」

礼儀正しく挨拶してきたのは、もちろん真宵後輩だ。

「おはよ。……今日も時間バッチリだったけど、まさかとは思うが見張ってたりしてないよな？」

「なんで私がそんなことしないといけないんですか。やる意味がありませんし、やる必要もありません」

「だよな。お前ならやりかねないから、心配してたんだよ」

「どういう意味ですか、それ」

真宵後輩に「何でもねえよ」と答えながら、学校に向けて歩き出す。

真宵後輩の首からは、十字架のような形をした透き通るような銀色の首飾りが下がっている。

俺がこの首飾りを見ていないのは、もう見慣れているからだ。

「なんですか、そんなにじろじろ見たりして。私の制服姿はそんなに珍しいですか？」

「珍しいってよりも新鮮だな。パツと見だの間違つかもしれねえな」

「そんなに私の制服姿は新鮮なのですか……。確かに私からしても先輩の制服姿は新鮮ですから、おあいこですかね」

相変わらず無表情を貫きながら、俺たちだけに共通する話をする。

「それにしても不便です。動きにくいです」

「あつ、それは俺も思った。あつちじゃもつと動きやすい服だったから、改めて制服来てみたら動きにくいんだよな」

「私はスカートですから先輩ほどの違和感はないと思いますが、やはり妙な感じですよ」

制服のスカートの裾を指でつまみ、すぐに離す。

なかなか慣れないもんだな。二週間近くも制服着てるけど、違和感がありすぎて落ち着けない。

あつちの世界じゃもつと違う素材で出来てる、着流してみたいなので過ごしてた。それなのに生地が頑丈で、どれだけ激しい動きをしても破れるなんてことはなかった。

動きの妨げになるようなこともないし、着たときにまるで違和感を感じない。

真宵後輩はミニスカートだったけど、やっぱり違うんだらう。

「あつちの素材で制服も作ってもらえばよかったです」

「その考えはなかった。そうすりゃ、こんな着心地の悪さを感じることもなかったか」

俺たちが喚び出されたときは制服姿だった。

替えの服なんて用意してる暇もなく初めての戦いを経験してしまったから、そのせいで制服は見るも無惨な姿になった。

そのあとに俺は着流し、真宵後輩はスカートを受け取ったんだ。帰りに制服を直してもらったんだが、真宵後輩の言う通りあつちの素材で作直してもらえばよかった。

「けどそんな余裕もなかったし、仕方ねえよ」

「そうですね。あの冬道かしぎ先輩ですらも、別れ際には泣きそうになっていましたからね。制服なんかに拘っている余裕なんてないでしょう」

「……うっせえ。お前なんか号泣してたろ」

「……うるさいです。恥ずかしいから思い出させないでください。あんな姿を先輩に見られたのは一生の恥です。黒歴史ですよ」

「そんじゃ痛み分けてとこだな」

あのときのことを掘り返されるのは、お互いに恥ずかしい。

普段はクールキャラで通してる真宵後輩からしたら、別れの場面

だからとはいえ、あそこまで号泣したのは言われたくないことだ。俺は単純に、男として言われたくないっていう理由だが。

だけどもあ、今まで旅をしてた仲間ともしかしたら一生会えなくなる別れだったんだから、泣いてしまうのは仕方がないと思う。誰だって、一生の別れは辛いものだ。

「ときに真宵後輩よ」

「なんですか、かしぎ先輩」

「こつちに還ってきてから『地杖』、使ったりしたか？」

「使うはありますがありません。『地杖』をこつちの世界のどこで使えって言うんですか？ 日常生活で使うような場面ありませんし」

「俺の『天剣』よりは使えると思うぜ？」

『天剣』は文字通り剣だから、それこそ使う場面なんてものに巡り会えるはずがない。

それに引き換え『地杖』は戦う以外にも使える場面があるんだから、使っても不思議ではない。

「そうでしょうけど、普通に考えて日常では使えません。どんな事態に巻き込まれるか分かったものではないですから」

「そんなもんなのか？ ……使えそうで使えねえな、これ」

首からぶら下がる剣の形をした金の首飾りを摘まみながら、素直な感想を述べてみる。

「当たり前でしょう。『戦い』を前提としたものを、日常のどこに使うんですか。喧嘩にでも使う気ですか？」

「それも考えたんだが、並大抵の奴には負けないから意味ねえんだ」

「考えたんですか……」

真宵後輩は呆れたように俺を横目で見てくる。

考えたっていつても、使う場面にならないから意味がない。というよりも使う場面になれない。

肉体が鍛える前に戻ったっていつても、反射神経までもが元に戻るわけじゃない。だから、喧嘩になっても相手の動きが手に取るように分かるからすぐに終わってしまう。

力の入れ方も、どこを狙えばいいかも分かるから、今のところ巻き込まれた喧嘩じゃ負けなしだ。

あっちに行く前の俺は何をしてたのか、喧嘩に巻き込まれるなんて日常茶飯事だ。

今じゃ、不良に見られたら頭を下げられるくらいだ。

いわゆる、不良たちの頂点に立ったってことを意味する

元勇者が不良たちの頂点だなんて、奇妙な話だよ。

「冗談だ。そこの雑魚に使うわけねえよ」

「こつちの世界で先輩が『天剣』を使うような場面になったら、どうなるか分かったものじゃないです」

「そしたらお前も『地杖』を使えばいいだろ？」

「そんな場面に出会ってみたいものですね」

俺は「そりゃ無理な話だ」と肩をすくめた。

元勇者の二人が『戦い』がない世界で『天剣』と『地杖』なんか使ったら、町のひとつやふたつ、簡単に地図から消え去るぞ。

「そういえば、あのニユースを見ましたか？」

「あのニユースなんて言われても分かんねえよ」

ニユース自体見てないから、内容言われても分からんだろうが。

「失礼しました。私も偶然目に入っただけなんですけど、人が誰かに襲われてたというものでした」

「……誰かに襲われたって、通り魔とかか？」

「あまり興味がないみたいです」

「んー……興味がないって言えば興味なんてねえんだけど、今さら通り魔とか言われてもな」

「確かに、そうでしたね」

俺たちは通り魔どころか、魔獣とかモンスターとか、魔王と戦ったことがある。

こつちからしたらニユースに上がるようなことだろうけど、あっちからしたらそれが普通だった。

食つか食われるか。殺すか殺されるか。

そんな環境に身を置いてただけに、通り魔と言われてもいまいち反応の仕方が分からない。

「それでは先輩は通り魔に襲われても返り討ちにしないようにしてください」

「あんな、通り魔になんてそう簡単に会えるもんじゃねえぞ？」

「もしもの話です。先輩の場合、通り魔に襲われでもしたら、通り魔の方が心配です。先輩なら逆にボコボコにしまいそうですから」

「一般人をボコボコにするような真似はしねえっての」

俺からしてみたら通り魔でも一般人程度にしか見えない。

ただナイフを持って襲ってくるだけ、その程度の一般人。そんな相手をボコボコにするようなことはしない。

「むしろ俺はお前の方が心配だ」

「……な、なぜでしょうか？」

「なぜって、そりゃ俺は前衛で戦ってたから通り魔なんかじゃ負けねえけど、後衛で戦ってた真宵後輩は『もしも』ってことがあるからだよ」

「む。私だって通り魔なんか遅れをとるような失態はしません」

俺の言葉が気に入らなかったのか、真宵後輩は口先を尖らせていた。

「俺だってお前が遅れをとるとは思ってねえよ。それでも心配なもんは心配なんだよ。お前には怪我なんかしてもらいたくねえし」

素直な気持ちだ。真宵後輩が通り魔なんか遅れをとって怪我するとは思えないが、それでも絶対とは言い切れない。

俺がいつでも側についてやる事が出来れば、そんな心配はないんだが。

「……」

「なに黙りこんでんだよ」

「何でもありません。先輩に心配されるなんて、私もまだまだだと思っただけです」

「あつそ。まあ、怪我だけはすんなよな」

俺は言いながら、隣を歩く俺の胸辺りまでしか身長がない真宵後輩の頭に手をのせる。

「や、やめてください。こんな往来の場所で……。恥ずかしいですよ」

「照れることねえだろ」

真宵後輩に弾かれて行き場の失った手を開閉させる。

会話をしている間に俺たちが歩いていった桜の並木道を抜け、目線の先には私立桃園高校が見えてきた。

私立桃園高校なんて名前だが、別に三國志の英雄は関係していない。

ただ、そこに咲く桃色の花は全国的に有名で、それを見た人間を魅了するほどには美しい。

入学の季節にはちょうどいい、祝いの花みたいな存在だ。

「ではまたあとで。失礼します、かしぎ先輩」

「ああ、またあとでな」

校門を抜け下駄箱に到着した俺たちは、靴を履き替えると反対方向に向かって歩き出した。

一学年は左側の廊下、二学年は右の廊下の先にそれぞれの教室がある。

そして三学年の教室は、下駄箱の正面にある廊下の先にある。

だから俺は右に曲がったわけだ。

「はあ……。よし、行くか」

真宵後輩と別れて若干の寂しさを感じるが、それをため息に乗せて吐き出し、廊下を踏みしめた。

1 3 「学校」

綺麗に掃除され、春休みにワックス掛けをされた廊下を歩く。踏みしめる度に内履きと廊下の表面が擦れる音が俺の耳に届いてくる。

それを不快に思ってしまうような繊細な神経はしていないが、「自分はここにいるよ」と強調しているようなこの音は何だか考えようによっては、注目してもらいたい人が発しているように思える。しかしあいにくと、この廊下を歩いていたのは俺ひとりだったため、誰ひとりとして注目するような人間はいない。

教室のドアの上に取り付けられたクラスが書かれたプレートを確認し、廊下の一番奥にあたる「2 A」のドアの前に立った。ドアに手をかけ開くと、俺の目の前にはクラスの光景が広がっていた。

学年がひとつ上がってクラスメイトが変わってしまったが、二週間近くの時間は仲良しグループを分けるには十分すぎる時間だ。

一学年のときから仲のよかった奴ら。

新しく仲のよくなった奴ら。

そんな奴らがいくつかのグループを作って、それぞれの話題で盛り上がっている。

そして俺もまた、仲良しグループっていうのに漏れずに入っていたりする。

俺の席は窓際の後方から二番目という、みんなが欲しがる居眠りをするための特等席だ。

窓際だけに窓から空を見上げること、外の風景を見ることが出来るから、授業に飽きたときはそうやって時間を稼いだりできる。ただ、俺は教室じゃなくて屋上でサボることの方が多いから関係なかったりするのだが。

俺は会話をするグループの脇を通り抜け、自分の席に着く。
と同時に、後ろから体重がかけられた。

「おはよー、冬道。今日も相変わらずの重役出勤で何よりだぜ」

「重役出勤ってなんだよ。重いから退け、柎」

「いいだろ？ スキンシップだよ、スキンシップ。こつやって愛情を育むのさ」

「気持ち悪いぞ、バカ。お前となんか愛を育みたくはねえよ。さつさと退け、重い」

「うっわ、ヒデエ。その言葉は普通に傷つくぜ？」

絶対に本心からは言わなそうな妄言を口にしながら、柎詩織ついでまじは俺の背中から退く。

口調のとりの奴で、男勝りな性格をしている。

だというのにポニーテールにまとめられた髪とその顔立ち、女性的なメリハリがあるため、柎が女であるということを忘れずに済んでいる。

しかし本人はそれを全く意識してないのか、さっきのようなことは割りと日常茶飯事だ。

背中にあたる二つの山は、男の夢が詰まってるのか非常に柔らかい。

「だいたい、女の子に重いなんて言うもんじゃないぞ？」

「……そんなこと言うなんてお前、変なモンでも食ったのか？ 手術してこいよ」

「なんで自分を女扱いしただけで手術をしないとイケないんだっ！」

「普段から男みたいなの振る舞いしてる奴を、今さらどうやって女に見ろってんだ。無理にも程がある。寝言は寝て言え」

窓の外には、遅刻しそうになっているのか、急いで学校に駆け込んでくる生徒の姿が見える。

別にそこまで急がなくてもいいだろうに。

「ぐっ、それを言われると何も言えないぜ……。で、でも一応あたしだって女らしくしてるつもりなんだよっ……！」

「……どこら辺がだよ」

「髪を纏めるゴムはしつかり選んだりしてるし、休みの日だってそれなりにオシャレするようになったし……」

「そんなのやる前に、口調と行動を直した方が女らしくなれると思うぞ？」

「その手があったか！」などと喚き散らしているが、なんでその考えが最初に出てこなかったのかが不思議だ。

まさか、口調と行動は女らしくしてるとでも思っていたのだろうか？

仮にそうだとしたなら、目が曇ってると思えない。一度、眼科に行くことをおすすめる。

「で、なんでまた女らしくなりたいなんて言い出したんだ？」

「ん？ 特に意味なんてねえって。ただ、もうちょっと女らしくなりたいって思ったんだよ」

「ふーん。別に今のままでいいと思うけどな」

その方が話しやすいし、変に女らしくなかなられてもこっちの調子が狂っちゃまうからな。

「そうか？ お前が言うなら、そうなのかもしれないけど」

「正直、どっちでもいいけどな」

「適当かよっ！」

適当とは失礼な。俺は今のままの方が話しやすいが、女らしくなりたいならそうした方がいいって意味で、どっちでもいいって言ったんだ。

適当なんて言ってもらっちゃ困る。

「……ったく。お前、変わったよな。去年は話しかけても今みたいに返してくれなかったのにさ」

「それ、妹にも言われた」

「あたしやお前の妹だけじゃなくて、みんな口を揃えて言ってるよ。」

『あいつ、なんか変わったよな』って。何があったんだよ」

「異世界で勇者やって、魔王倒してきたんだよ」

それを聞いて柊はため息をつく。

「またその話かよ。国語の評定が二のお前にしたらよくできた話だと思っけど、そんなのじゃ小学生も騙せないって」

高校の評定は五段階評価で、五が最高で一が最低。

つまり、俺の国語の成績は最低を何とか逃れることが出来た程度のものでしかない。

「本当だったの。異世界に召喚されて、魔王を倒す旅をしてきたんだよ。結構辛かったぜ……」

「まだ言ってるし……。話す気ないなら無理には聞かねえよ」

諦めた風に息を漏らして、柊は自分の席に座る。

自分の席っていつても、俺の後ろの席だ。

……まあ、こんな反応でも仕方がない。

異世界に召喚されて勇者になって、魔王を倒すなんていうのは、柊からしたら小説や漫画の中だけのことでしかないんだ。

だから呆れられても文句は言えない。

これを分かってくれる人なんて、ひとりいれば十分だ。

「おはよう。相変わらずかしぎと詩織は仲がいいな」

俺がそんなことを思っている最中、上から唐突に声をかけられた。見知った声だったため、後ろに座っていた柊がいち早く反応を示した。

「おはよー、両希」

「自分から俺に話しかけてきてくれんのは、柊とお前くらいのもんだからだよ、両希」

実際、俺に自分から話しかけてきてくるなんていうのは、このクラスには二人しかない。

柊と、目の前にいる両希蓮也だ。

前のクラスはあと何人がいたが、クラス替えになってそいつらはバラバラになってしまった。

両希は俺の斜め後ろ、柊の隣の席に座る。

「そうだな。だが、幼馴染みに話しかけるのは当然だろ？」

「そんな風に平然と言えるところがカッコイイよ、お前は」
なんの不幸か、俺の幼馴染みは美少女でなければ女の子ですらない、この男である両希蓮也なのだ。

長く伸ばした髪は無造作というよりも整えられた長さという感じ
で、かけているメガネがクールな感じを引き立たせている。

簡単に言えばイケメンだということだ。

容姿端麗、成績優秀スポーツ万能。おまけにルックスがいいなんて、男からしたら嫉妬の対象になるだろう。

だが、そんな両希にも欠点がないというわけではない。出来れば、
なかった方がよかった欠点があったりする。

「まさかとは思いが、今日もかしぎは藍霧真宵と一緒に登校してき
たのか？」

「……まあな」

「くっ、羨ましいぞ！」

立ち上がり、拳を握りしめながら叫ぶように言ってきた。

欠点というのはこれだ。

両希は一途というかなんというか、良くも悪くも一直線に進んで
しまうような性格をしている。そのくせに、方向音痴だから質が
悪い。

一直線にしか進めないだけに、間違った方向に進んでしまっても
切り返すことが出来ないのだ。

なんというか、凄く残念なイケメンなんだよな。

「かしぎ！ お前は今や『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』から
狙われている身分だ！」

「だから『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』ってなんなんだよ…

…」

学校のアイドルなんてものが存在するのはそれこそ想像上の話だ
けかと思ってたが、それにファンクラブや精鋭部隊があるなんても
う、引くしかない。

俺の話を聞いて馬鹿にしない柊ですらも苦笑いをしてるくらいだ。

結構、ヤバイのではないかと思う。本気で。

しかもそれが幼馴染みとなつてくると尚更だ。

「『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』というのはだな

「いや、俺が聞きたいのはそんなことじゃなくて……」

「黙つて聞くんだけ！　かしぎ！」

「……」

諦めるしかなさそうだった。

なんで今日もそのことを聞かされないといけないのだろう。

俺たちが異世界から還つてきてから、毎日聞かされている。

最初こそ、その『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』とやらが気になったが、こう毎日聞かされてるんだから忘れられるはずがない。もしかしたら、魔王と戦ったときよりも過酷かもしれないぞ、これ。

「んんっ、気を取り直して。『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』というのはだな、この私立桃園高校に舞い降りた藍霧真宵めぐみを称えるための会だ。

精鋭部隊として、変な虫がつかないように露払いなどもしているんだ

「へー、そうなのかー」

「聞いているのか？　かしぎに詩織！」

「あたしも!？」

驚いたような声を上げた柊に「当たり前だ!」と一喝している両希の姿を見て、もうため息しか出ない。

いつもは傍観者である柊もいきなり巻き込まれて大変そうだ。

俺としてはひとりからふたりになったことで、負担が半分になったから喜ばしいことだ。

「全く……。かしぎよ、お前はいつたい我らが藍霧真宵めぐみに何をしたのだ?」

「異世界で一緒に勇者してきた」

「嘘をつくな!」

バン、と机を叩きながら鬼気迫る表情で叫ぶ。

注目されそうな行動をしているのに誰も気に留めないのは、毎日の恒例行事になっっているからだ。

このときばかりは俺に話しかけてこないみんなが頑張れ、という眼差しを送ってきてくれる。　　ような気がした。

「異世界で勇者をしてきたなんて、幼稚園児でも騙されないぞ！」
小学生から幼稚園児に格下げされていた。

「正直に白状したらどうだ？　そうすれば尋問をする必要はなくなるんだ」

「尋問って、おい。っーかよ、別に何もねえって。朝だつて俺の家に迎えに来るのは家が近いからつてだけだろうし……あ」

言ってから気づいてしまった。自分で暴露してしまったという事実に。

そういえば『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の奴らは、真宵後輩が俺を迎えに来てることを知らないようにされてたんだ。

「かしぎ！　なんて羨ましいことを！」

「ちよっ、泣きつくくな！　鬱陶しいだろバカ！」

「これが泣かずにいられるか！　お前には分からないだろ、この悔しさが！」

分からねえよ。俺は心の中で吐き捨てた。

とりあえず泣きながら抱きついてくる両希を押し返して、席に座らせて息をはく。

「俺と真宵後輩は別に恋人とかじゃねえし、あっちにもそんな気はねえだろうから安心しとけ。当分は彼氏が出来た、なんていう噂は出ねえよ」

「そうは言ってもだな？　我々が調べたところによると、こうやって藍霧真宵が他人と話してるなんていうのはかしぎ、お前が初めてなんだ」

この世界のプライバシーは、俺がいなくなつてた空白の五時間にも改訂されたのだろうか。

「こんな怪しげな団体に簡単に調べられるなんて、真宵先輩も迷惑しているに違いない。」

「二週間前までは何の接点もなかったかしぎと彼女がいきなり話すようになるなんて、何かがあったとしか思えないんだ。さあ、さつさと白状するんだ！」

「何もねえつての。この前から言っただろ？」

「あくまでも答える気はないみたいだな」

答えるも何も、本当のことを話しても信じてないのはそっちだろ
という言葉を俺は飲み込む。

信じてもらえないのは百も承知だからだ。

とはいえ、そうなると言い訳が思い付かないのが現状だ。

今までまるで接点がなかった俺たちが、いきなり一緒に行動するようになった理由。

そんなものがパツと思いつくはずもない。

「なら、夜の道は背中に気を付けることだ」

「おおっと、脅迫でもする気か？」

「これは脅迫じゃない。近々、我々『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』は容疑者・冬道かしぎに闇討ちをかける！」

「闇討ち！？ て、 teme、冬道になにする気だよ！」

「いや、闇討ちって言っただけじゃん。落ち着けよ、柊」

「これが落ち着けるかーっ！ ……ってなんで闇討ちされる本人が一番落ち着いてんだよ！」

両希の胸ぐらを掴みあげた柊は、そのまま見事なノリツッコミを繰り出してくる。

どうでもいいけど両希が青い顔してるから離してやってくれ。

「と、とにかく！ 夜はあまり外を出歩かないようにした方がいい
……お前って『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の一員なんだよな？ なのに、なんで俺に闇討ちのこと教えてるんだ？」

「なんでって、そんなの僕とかしぎが幼馴染みだからに決まってるだろ」

俺は両希の発言に呆気にとられてしまった。

闇討ちを企てるような団体に入ってるくせに、やっぱり俺のことを心配してくれるんだな、こいつは。

「やっぱりカツコイイよ、お前」

「でもさ、忠告するくらいなら止めてやれよ」

言われてみると、確かに柊の言う通りだった。

「……」

おい、なんでそこで顔を逸らすんだ、両希。忠告はしてくれるくせになんで止めてはくれないんだよ。

「まあ、気を付けておくよ。なんせ、幼馴染みの忠告だからな」

「次に会うときは『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の両希蓮也だからな。覚悟しておけ！」

「それでも忠告はしてくれるんだ？」

「……」

そこは「しまった」みたいな顔をするような場面じゃないと俺は思う。

とりあえず、夜に出歩くときは背中に注意しておくか。この怪しい団体なら本当に闇討ちもやりかねん。

このあと担任の教師が教室に入ってきたため、話は一時中断することになった。

中世の欧州ヨーロッパのような宮殿。その王室に、一組の異界より召喚された男女の姿があった。

男は今の状況がまるで呑み込めていないのに対して、女は周りの状況など意に介した様子はまるでなかった。

無表情な顔の無感情な瞳。

それが、ヴォルツタイン王国の皇女の体を貫く。

「……ここはいつたいていどこでしょうか？ どうして私はこんな場所

にいるのか、説明してもらいますよ」

凜とした声が広い王室に響き渡る。

周りには武装した兵士がいるというのに、毅然とした態度のまま、皇女の元へと歩み寄っていく。

カツカツと響くブーツの音は、自分の存在を明確に示しているようにさえ思えるほど、堂々としたものだった。

皇女の目の前になると女は立ち止まる。

王座に座る皇女を見下ろすように位置取りながら。

「いきなりこのような場所に喚んだことには、お詫びを申し上げます。ここはグリタニア大陸のヴォルツタイン王国です。私はヴォルツタイン王国の皇女です」

「……………」

「何を言っているか分からないとは思いますが。我々は、異界より貴方達を喚び出したのですから」

「貴方達？」

皇女に言われてようやく男の存在に気がついたのか、女は後ろを振り返り男に視線を向けた。

しかし、すぐに興味をなくしたのか皇女に向き直る。

「喚び出したとはどういうことですか。異界、と言いましたが何故私たちを喚び出すような真似をしたんですか」

威圧的な口調に皇女はわずかに圧倒されながらも、冷静を保つ。

皇女が圧倒された理由など、単純明快だ。

喚び出した、なんていう魔法のような言葉を口にされたにも関わらず、あたかもそれを信じたかのように状況把握に努める冷静さ。もしも自分が同じ立場に置かれたら、このように振る舞うなんてことが出来るわけがない。

何もかもが分からない、何が起こるか分からない恐怖によって、そんな余裕は削られている。

息を呑み、慎重に言葉を選ぶ。

「あなた方をお願いがあつて、喚び出しました」

「……なんですか、お願いとは」

「我々の世界を、救っていただけではないでしょうか？ 我々の世界を救えるのは、あなた方だけなのです！」

「嫌です。お断りします」

「えっ……？」

「どうして私がそんな真似をしなければならないのでしょうか？」

いきなり喚び出されて世界を救えだなんて……意味が分かりません。感情の籠っていなかった瞳に、鋭さが現れた。

女の言い分はもつともだ。いきなり見ず知らずの場所に連れてこられ、それで自分達の願いを聞けなんていうのはおこがましいにも程がある。

しかも願いが世界を救えというものだ。馬鹿げているとしか言いようがない。

「そんなものはあの人にも任せておけばいいんです。私には関係ありません。元の世界に還してください」

「で、ですが、我々の精鋭部隊は魔王に全く歯がたたず、もう異界の勇者に任せるしか」

「だからなんです？」

女の声が、焦る皇女の声の途中で割り込んだ。

「他人任せも甚だしいですね。魔王に勝てないから、異界から喚び出した勇者に丸投げですか？ 第一に、私には勇者なんて呼ばれる力は一切ありません。ただの一般学生に何を求めているんですか？」

「……」

皇女は女の言葉に答えることが出来ない。

一般学生という言葉が理解できないわけじゃないだろう。

ヴォルツタイン王国と呼ばれるここにも、学業を学ぶ場所がないわけではないだろう。

いくら世界が違えど、一般学生が何を意味するかは分かる。

選りすぐりの精鋭部隊が勝てない魔王と戦わせても、結果なんてものは考えるまでもない。

「分かりましたら早く還してください。もう一度言いますが、勇者ならあの人にも任せておけばいいんです」

「……私たちの国の言い伝えにあるんです」

ぼつりぼつり、と皇女は呟いていく。

「『天剣』と『地杖』に導かれし勇者が舞い降りるとき、混沌とした世界に光をもたらす。金の刃と銀の杖、現れし勇者に授けるべしと」

「よく有りがちな設定ですね。聞こえは良いように聞こえますが所詮は、他の世界から来た人間に丸投げしてるのと同じですよ？」

女は決して首を縦に動かそうとはしない。

悉くを否定し、皇女の期待をどんどん削ぎ落としていく。

「『天剣』と『地杖』、でしたっけ？ そんなものがあるなら最初から使えばいいじゃないですか」

「……『天剣』と『地杖』には意思があるんです。この二つが選んだ者でなければ、使うことは出来ません」

「それは残念でしたね」

「あなた方は『天剣』と『地杖』に選ばれました！ あなた方しか

……世界は救えないんです……」

拳を強く握りしめ、唇からは血が一筋流れ出ている。

強く噛み締めた証拠だ。

この皇女も魔王から世界を救うために最善を尽くし、出来る限りのことをしてきたのだろう。

それでも、駄目だった。

だから最後の手段として、『天剣』と『地杖』に選ばれたこの二人に世界を救って欲しいと願っているのだ。

そのことが分からないわけではない。

だが、それでも。

「だからなんですか？」

皇女の胸に、言葉が突き刺さる。

「何故私が見ず知らずの他人のために、そんな危険を犯す必要がある

るのでしょうか？ 何のメリットもなく、デメリットしかない願いを聞く理由は ありません」

これとないくらいに、女の言葉は止めとなった。心臓が止まる思いだった。

最後の手段として『天剣』と『地杖』によって選ばれた者を召喚し、懇願した結果がこの様だ。

一概に召喚するといっても、無数に存在する異界から、たった二つを見つけて出して召喚する。それは砂漠の砂の中から小さな真珠を見つけて出すようなもの。

苦労して、ようやく見つけ出した希望は、淡い泡として消え去った。

皇女や、周りの兵に絶望の色が見え始める。

「さあ、早く還してください。あの人なら置いていきますから。勇者なら、ひとりいれば十分でしょう？」

皇女は答えられない。もう、言葉が出てこない。

女の言葉の通りであるならば、言い方は悪いがこんな女に頼みはしない。しかし、それでも頼み続けた。

すなわち、勇者は必ず二人いなければならぬのだ。

『天剣』と『地杖』に選ばれた、二人の勇者が。

「何をしてるんですか、早くしてください」

「……しばらく還ることは、出来ません……」

かすれた声で発せられた皇女の言葉に、女は形の良い眉をしかめた。

「どういう意味ですか」

今までにないくらい鋭い声だった。

感情が籠っていなかった声に怒気が宿ったのが分かる。

「……あなた方二人を喚び出すには、大量のエネルギーが必要でした……。還すにしても、同じくらいエネルギーの充填が必要となります」

「何とかならないのですか？」

「こればかりは、時間をかけなければ……」

「どのくらいかかりますか？」

「貴女ひとりを選ずにしても、二年以上はかかります」

「二年！？ ふざけないでくださいっ！」

ここに来て女は初めて感情と言えるほどの感情をむき出しにして、皇女に向かって掴みかかった。

「明らかに丸投げする気だったんじゃないですか！ ふざけないでください！」

「……………」

掴みかかられた皇女の目には、まるで光が宿っていない。

頭を垂れ、女のなすがままにされている。

皇女がこんな風にされているというのに、護衛として周りに立っている兵は動く気配は一切ない。

絶望に支配され、誰もが動けないのだ。

最後の希望が泡のように消え去ろうとしている事實は、絶望を与えるには十分すぎるほどに十分だった。

だが、まだ消えたわけじゃない。

「おい、お前。還れねえからって皇女様に当たっても意味ねえだろ」
今まで声を発することがなかった男の声が、絶望に満ちる王室に響き渡った。

午前中の授業はしつかりと夢の中で受けていたため、あつという間に過ぎていった。

両手を上に上げて、凝り固まった体をほぐす。

黒板を見る限りだと今の授業は物理だったみたいだが、俺の机に置かれている教材は数学だということは気にしない。

ちなみに数学があったのは一限目。

……ずいぶんとよくお眠りになってたんだな、俺。

「やっと起きたのかよ、冬道。どんだけ寝りゃ、気が済むんだ？」
黒板に書き記された授業内容を、柊は綺麗にまとめながら呟くように俺に言ってきた。

その性格に見合わず、綺麗な文字は見やすく丁寧にまとめられている。

「若いから眠くなるんだよ。それにあれだ、授業で聞いている先生の話って子守唄みたいで眠くならねえ？」

「あつ、それはあるな。特に分からねえところって『あー、もうやっつてらんねえ』って感じになってさ」

「よく分かってんじゃん。俺の場合はそれが全部だ」
「勉強しろ」

驚くほど冷たい声で言われてしまった。

高校の授業で習ったことなんて社会に出たら何の役にも立たないのに、なんでこんな苦勞して学ばないといけないんだろう。

数学や国語ならまだしも、物理なんか学者にでもならなきゃ使う場面なんてない。言い切ることが出来る。

……なんていう、中高生ならありがちな思考をシャットアウトする。

意味がないのは分かってるけど、高校を卒業できないと就職とか厳しいからな。やるときはやらないといけない。

その点、柊は真面目だと思う。

男勝りな性格のくせに、こういうところは真面目なんだよな。

ふと、腹の虫が抗議をあげていることに気づいた。自己主張の激しい腹の虫をなだめるために、俺は購買部へと向かうことにする。

俺は料理なんて出来ないから、弁当なんか作ったりしない。

妹のつみれに任せてもいいけど、さすがにそこまでやらせるわけにはいかないから、いつも昼飯は購買部がコンビニで済ませてる。

俺の家は親が共働きで、普段は家に帰ってこない。

仕送りはちゃんとされてるけど、金の管理はつみれに任せてる。

妹に小遣いをもらう兄って、物凄いシニールな光景だと思う。

「冬道かしぎ先輩はいますでしょうか？」

廊下の方から、聞き親しんだ声が入ってきた。

声をかけられた生徒は、学年が下の生徒が相手だというのに、圧倒されているように見えた。

そいつは俺のことを見つけると、教えてもらった生徒に礼を言うことなく、堂々と俺の方に向かってきた。

「また来たのか、真宵後輩よ」

「またとはなんですか。嬉しくはないんですか？」

「嬉しい嬉しい超嬉しい。大好きだぜー、真宵後輩」

冗談で言った言葉に両希を含めた何人かのクラスメートが反応していた。

なるほど。お前らが俺に闇討ちを仕掛けようとしてる『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』か。顔は覚えたぞ。闇討ちしようものならお前らには手加減しないからな。

「先輩が口先だけなのは分かってます。早く行きましょう。ここは不快です」

「はいはい、分かったよ。購買部に寄ってからでいいだろ？」

「行く必要はありません。先輩の分のお弁当は、私が作ってきましたから。足りないというならば構いませんけど」

……俺に突き刺さる重圧が五倍増しになった気がする。いや、間違いない五倍増しになっただろう。

『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』の奴らにとって、真宵後輩の手作り弁当というのはどんな高級料理にも勝る一品だ。

それを俺がもらうもんだから、嫉妬してるに違いない。

俺はこの重圧に気づかないフリをしながら、真宵後輩の背中を押して教室から出ていく。

二学年の廊下を通ると嫉妬の重圧はさらに重いものとなり、そこを抜けて屋上へと行くための階段まで来るとようやくそれはなくなつた。

「どうしたんですか？ そんなに急がせて。そこまで空腹だったん

ですか？」

「そうじゃねえよバカ。分かってるくせに訊くんじゃねえよ」

「大変ですね」

「……おかげさまでな」

他人事のように言う真宵後輩に若干の怒りを感じながら、屋上の扉を開け、中に入る。

そこは落下防止用に鉄格子に囲まれてるだけで、何もない殺風景な場所だ。

屋上なんて高校にあっても使う人なんてほとんどいないから、俺たちがサボったり飯を食ったりするにはうってつけの場所だったりする。

「どうぞ」

「おう。サンキュー」

真宵後輩が持っていた二つの弁当のうち、青色の包みに包まれていた方を受けとる。

弁当を開けてみれば、見かけによらず可愛い中身をしていた。それに美味そうだ。ひとつひとつが手作りのようで、冷凍食品がないみたいだ。

「ずいぶん手のこんだ弁当だな。俺のために時間をかけてくれたのか？」

「残念ながら違います。今日はたまたまです」

「ですよー。頼んだわけでもないのになんで作ってきたんだろと疑問だったけど、どうせそんなことだろうと思ったよ。」

真宵後輩が俺のために弁当なんか作るわけがない。

「ですが」

「むぐ？」

「……手をつけるのが早いですね。いいですけど。もし先輩が私の手作り弁当を食べたいのでしたら、毎日作りすぎますがどうしましよっ？」

直接作ってくるって言わないのが、真宵後輩らしいな。

「じゃあ毎日作りすぎてもらうとするかな」

「分かりました。では、楽しみにしておいてください」

楽しみにすると同時に、嫉妬の重圧を受けることになるんだろうけど、気にしないでおくとしよう。気にしてたら埒があかない。

見た目通り味が美味かったため、会話をすることなく弁当を平らげてしまった。

真宵後輩はまだ半分も食べてないが。

「そういえば、さっきだな」

「なんですか？ ……むぐ」

「お前が俺の家に迎え来てるの、バレちゃった。スマン」

「別に構いませよ。バレたからといって、私には何の害もありませんから」

そうだったよ。こいつは自分に害がなかったら、自分のことでもどうでも思う奴だったよ。

「前々から気になってたんだけどよ、なんでお前、わざわざ俺と弁当を食おうとするんだ？ 迎えに来んの面倒じゃね？」

「その程度なら面倒だとは思いません。それに、食事は楽しくとりたいですから」

「クラスで友達とかいねえの？」

「……いますよ」

どうやら、クラスには馴染めていないようだった。

この性格じゃ、馴染めないのも仕方ないか。

でも、食事を楽しくとりたいうのは嘘偽りのない本心からの言葉なのだろう。それは俺も共感できる。

「クラスで食事をするよりも、癪ですが先輩と一緒にの方が楽しいですし、楽ですから」

「クラスの連中と一緒に俺は楽しいが、やっぱりお前と一緒にの方が楽しいし楽だな」

普通の話題で話してもいいが、真宵後輩と異世界での話をしてた方が楽しく感じる。それ以外でも楽しく感じるけどな。

別につまらないってわけじゃない　　けど、満たされないっていうこともまた事実。

正直にいうと、真宵後輩には気を使う必要がなくて楽だ。お互いに家族みたいに接しても何の問題もない。

「お前つてスゲー人気だよな。ファンクラブとかも出来てさ」

「いい迷惑です。付きまとわれたりもしますし、この前なんてストーカーまでいましたから」

「……アイドルかよ。で、そいつはどうしたんだよ」

「あまりにもしつこいので、少しだけ懲らしめたらついてこなくなりました」

「使ったのか？」

「少しだけです。『地杖』は使ってませんから、そこまでの効力はありませんよ」

弁当を頬張る様子は非常に可愛いのだが、言ってることが危険だった。

それに真宵後輩の言い方からすると、こっちでも普通に使えるみたいだ。

「そんなに使う場面があるわけじゃないし、たまになら使つといた方がいいかもしれねえな。……いつ喚ばれても、いいようにな」

「そうですね。また喚ばれるとしたら、魔王が現れたときくらいでしょうから」

そのときに戦えませんかなんて言えないからな。

元勇者つていつても、あつちの世界に行ったら勇者になるんだ。

使い方を忘れるわけにはいかない。

……まあ、忘れることなんてないだろう。あれだけ必死に鍛練したんだ。簡単に忘れられるはずがない。

たまになら『天剣』を使ってみてもいいかもしれない、そんなことを思う昼休みだった。

1 4 「転校生」

町外れにある廃工場。寂れて使い物にならなくなったそれは、夜の暗闇により異様な不気味さを醸し出していた。

周りには建物はほとんどなく、点々としているだけ。

そのせいもあり、昼間はわずかにある人気も今はすっかり静けさを保っている。まるで世界に忘れ去られたような、そんな静けさだ。気味が悪いといつてもいい。

背後を振り向けばそこに誰かがいそうな、そんなまとわりつくような気味が悪さが辺りを支配している。

「ば、化物……！」

そんな廃工場の中で、一人の男がまるで何かから逃げるように走っていた。仕切りに「化物」という単語を口にして、その表情には恐怖が貼り付いていた。

何度も後ろを振り返り、何も無いことを確認する。

視界は暗闇が支配するばかりで、数メートル先ですらも見えないくらいだ。そんな中で何かが見えるとは思えない。

先にここに訪れた人間がいるのだろう。

床に散らばる鉄パイプに足をとられながらも、男は無様な醜態をさらしながら走る。

立ち止まってしまったら最後、それにのまれて二度と光を見るこ
とが出来ないような、そんな恐怖が男を支配している。

「『化物』とはずいぶん言いようだな」

「っ！？」

唐突に上から響いてきた甲高い声に、男は恐怖をさらに強めた。
それでも立ち止まれない。立ち止まるわけにはいかない。

この廃工場には上へと繋がる通路は存在していないし、はしごな
ども設置されていない。

つまり、上から声が響くなんてことは絶対に有り得ないのだ。なのに上から声が響いてくる。そんな異常な現象が、男の恐怖をさらに煽る。

何も考えられない。何かを考えている余裕なんてものは、既に男の中には残っていないからだ。

「いつまでこんなことを続ける気なんだ？」

声がかげられると同時に、男は浮遊感を感じた。

足が床についていない。体が浮かび上がっているということに気づくまで、一〇秒以上も要した。さらに手足が全く動かない。

男は恐怖と混乱に押し潰されそうになりながらも、視界の先にひとりの人間を捉えた。

「蜘蛛の巣にかかったら最後、逃げることなど出来ない。分かっているだろう？」

長細い、綺麗でしなやかな指が男の頬に触れた。

優しく微笑んでいながらも頬に感じる冷たさが、そいつの胸の内を表しているようで今にでも死んでしまいたい気持ちになった。

「解放されたいか？」

その問いかけに、男は即座に反応した。

ここから早く逃げ出したい。この恐怖から早く解放されたい。そんな感情が溢れてきたがゆえの反応の早さだった。

もしかしたら助かるのかもしれない。そんな淡い希望が、絶望しきった男に光として射し込む。

「私は強い奴が知りたいんだ。ここにいて、強い奴を知らないか？」

強い奴の定義がただ単に腕っぷしが強いというだけなのか、他の強さになるのかはこの状況では考えることなど出来やしない。

だから、自分が知ってるなかで強いと思える男の名前を無意識に呟いてしまっていた。

「し、知ってる。私立桃園高校二年の、冬道かしぎ……あ、あいつはかなり強い」

「冬道かしぎ、か。なら、次はそいつで決まりだ」
まるで噛み締めるように、その名前を呟く。

「お、教えたんだから、早く解放してくれ」

「……ああ、そうだな。解放してやる」

そいつはもう男のことなど、どうでもいいとばかりに上の空で答えると、今まで開いていた右手を握りしめた。

次の瞬間。確かに男は恐怖から解放された。

全身を切り刻まれる痛みに断末魔を上げて、気絶するというやり方によって。

「……つまらないな」

血だらけになり、床に横たわる肉塊となった男を見下しながら虚空に向かって言葉を投げ掛けた。

「冬道かしぎ……。今度は、楽しませてもらいたいな」

月明かりに照らされたそいつの口は、奇しくも今日の月のように、三日月に歪んでいた。

「遅いです、先輩」

「……悪かったよ」

朝。玄関を開けた先に待っていたのは、不機嫌そうにしている真宵後輩のしかめっ面だった。

今日は真宵後輩が迎えに来るのが予想外に早く、準備を終えてなかったため急いで準備したが、結局十分も待たせることとなってしまった。

待つのが嫌いな真宵後輩からしたら、機嫌が悪くなるには十分な時間だ。

「なに玄関の前に突っ立ってんのさ！ ちょっと退いて！」

「……っと、悪いな」

つみれは制服を着て、鞆を持って飛び出してきた。

俺はそれを間一髪に避けてつみれを見ると、もう既につみれの背中
中は遠くにあった。

「まだ遅刻するという時間ではないのに、何を急いでいたのですか
？」

真宵後輩の疑問ももつともだ。

いつもより遅いつていつても登校時間まではあと二〇分もあるし、
ここからつみれが通う中学まで歩いても一〇分もかからない。

「部活の朝練があるんだよ。本当ならもっと早く出ないといけなか
つたんだが、寝坊してな。ふあ……」

俺は口を手で隠しながら、盛大にあくびをする。

「ずいぶんと眠そうですが、夜更かしでもしたのですか？」

「まあ……そんなところだ。昨日はつみれの練習に付き合っ
て遅くまで起きてたからな。疲労も合わさって寝坊に繋がったんだよ」

まさか朝の三時まで付き合わされるとは思わなかった。

珍しく俺に練習に付き合っ
てほしいと言ってきたから付き合っ
てみたら、この有り様だ。

眠くて眠くてしょうがない。

「練習……。つみれ、でしたか。彼女は何の部活をしているのです
か？」

「空手だよ。組手の方」

「……空手？」

何故か真宵後輩が訝しげに問い返してきた。

俺の妹、冬道つみれは何を隠そう空手少女なのだ。

去年は空手の組手で全国ベスト三に入ってるし、おそらく今年は
全国大会で優勝も不可能ではないはずだろう。

さらにもう様々な高校から推薦も来てるみたいだ。

「……夜遅くまで兄妹で組手、ですか？」

「なんでそんな疑われそうない方すんだよ」

「他意はありません。ただ、夜遅くまで兄妹といえど男女が交わる
ような行為は感心しません」

目を細めて怪しんでいる真宵後輩の視線に、俺はため息を漏らす。別に俺は血の繋がった兄妹同士で過ちを犯す、なんていう特殊な趣味は持ち合わせてはいない。

「だいたい、空手の全国レベル程度が、先輩の相手になるはずがないじゃないですか。新手的いじめか何かですか？」

「同じ土俵に立ってみるとそうでもねえよ。何回か危なかったし」
空手のルールが分からないし、本気じゃなかったとはいえ、何回か踏み込まれるときがあった。

つみれからすれば踏み込めないことが驚きみたいだったが、俺的には踏み込まれたのが驚きだ。

そして隣を歩く真宵後輩も驚いていた。

「……先輩の妹は化物ですか？」

「失礼な奴だな。化物じゃねえよ、至って普通の女子中学生だ」

「普通の女子中学生は先輩に危機感を抱かせません」

真宵後輩は俺のことを過大評価しすぎていると思う。

こっちに還ってきて肉体の鍛練はリセットされた。

なら、同じ土俵に立ってルールが分からないんだったら、危ないと思うことのひとつくらいはある。

危ないといっても、踏み込まれそうになっただけで、触られてもないんだから大したことじゃない。

「先輩は自分の力を過小に評価しすぎです。あの魔王とやりあったのですから、もう少し自覚を持ってください」

「俺が誰にも負けないってことをか？」

「そうです。身近な人間に危機を感じるようでは、皆に合わせる顔がありませんし、安易にそんなことを言わないでください」

仲間想いというかなんというか、とにかくむちゃくちゃな言い分だった。

真宵後輩は最初こそ全てを受け入れない姿勢だったが、旅をするうちにそれが徐々に変わっていった。

最終的には、仲間を絶対に見捨てることのない主人公ヒーローみたいにな

っていた。

様々な出会いと別れを経験して、成長した結果だと思う。

「分かったよ。今度から気を付けさせていただきます、真宵後輩？」

「……なんだか、凄く馬鹿にされた気分です」

「馬鹿になんかしてねえって。皆のことが大切なのに、素直になれなかった真宵後輩のことを馬鹿にするわけねえよ」

「な、何を言っているのか分かりませんが……」

「あ？もしかしてバれてねえと思ってたのか？お前が仲間のことを大好きなのはとっくの昔に気づいてるっての」

それを聞いた顔を真っ赤にして、真宵後輩はうつむいてしまった。普段が普段だけに、そういう一面を知られるのが恥ずかしいだろう。

しかも本人たちの前では恥ずかしくて素直になれてなかったことを指摘されたんだ。真宵後輩でなくても恥ずかしいに違いない。

ふと、視界の端に淡い光が発光しているのに気づいた。

真宵後輩が握り締めている首飾りからだ。

「おいおい……照れ隠しにこの街を消し炭にする気かよ……」

「そんな気はありません。せいぜい、先輩の塵が残らない程度にしてあげます。安心していいですよ？痛みは一瞬です」

「安心できねえよバカ。さすがにそれを受け止めるとなると、俺も『天剣』を使わないと無理だぞ？」

俺は首飾りを握り締め、真宵後輩に見せつけるようにする。

真宵後輩の首飾り同様に、俺の首飾りもわずかに淡い光を放っている。

「冗談です。そこまで本気で対応しなくても大丈夫です」

「お前が言っていると冗談に聞こえねえよ」

普段からほとんど表情を変えないだけに、そういうこと言い出すと本当にやりかねない。

「それよりコンビニ二行こうぜ。朝、食ってねえんだ」

「仕方ないですね」

そう言って首飾りから手を話した真宵後輩の姿を見て、胸を撫で下ろす。

本気でやるうとは思っていないだろうけど、やっぱり身の危険があるならその可能性を潰しておいた方が安全に決まってる。

こいつは本当にやりかねない。

以前に同じようなことをやって、本気で殺されかけたのはいい思い出だ。今思い出すだけで冷や汗が出てくる。

俺の気持ちを知ってか知らずか、真宵後輩は涼しげな表情で俺の前を歩く。

「もちろん、依頼を受けたのですから報酬は貰えますよね？」

「……等価交換ってか？」

「違います。正当な報酬です」

無表情な彼女にしてはずいぶんいたずらじみた笑みを浮かべている。

こつこつこのを見ると、本当に変わったと実感する。

あつたばかりのときは、まさかこんな風に笑みを浮かべたりするなんて夢にも思わなかった。

こつこつ笑って笑ってたら、普通に美少女で可愛いのもつたいたい奴だ。

小さな顔に大きな瞳、柔らかそうな唇にスカートから覗く太ももからは色気が放出されている。

体のメリハリが乏しいといっても、本当にぺったんこなのではなく、バランスがとれている。スタイルがいいというわけだ。

性格に難があっても、モテる理由がこれだよ。

世間一般からしたら真宵後輩はとんでもない美少女なのだ。

「なら、仕方ねえか。今日だけだからな」

「当然です」

自動ドアが開き、中に入る。

俺は朝はがつり食べておきたい人間だから、弁当コーナーに足を進めていたのだが、止めることとなってしまった。

真宵後輩も同じだったようで、さつきまで楽しげな笑みを浮かべていたにも関わらず、今は無表情に逆戻りだ。

それだけでなく、なんだか珍獣でも見るような目で、それを見ている。

「……なんですか、あれは」

「俺が知るかよ」

短いやり取りのなか、俺たちはただ一点だけを凝視していた。

弁当コーナーの前に立ち、周りを寄せ付けない……というよりも寄ってはいけない雰囲気醸し出していた。

そいつは女の子だ。太陽の光を受けて輝きそうな綺麗な金髪を一本にまとめ、難しい顔をしながら並べられた弁当を品定めするように凝視している。

俺や真宵後輩と同じ制服を着ていることから、同じ私立桃園高校に通っている生徒だということが分かる。

だけど、俺たちは……少なくとも俺はあんな生徒は知らない。

知らないにしても、あんな目立つ容姿をしてたら同じ高校の生徒なら忘れられるはずがない。

「見たことない人ですね。かしぎ先輩はあの人のことは知ってますか？」

「俺もあんな奴は見たことねえな。見たら忘れられそうにもないし」
どうやら真宵後輩も見たことがないらしい。

ただ、真宵後輩の場合は他人に興味を示さないから見たことがあっても覚えていないだけなのかもしれない。

それにしてもあいつ……隙がない。

普通、人間というのはいくら警戒しても隙が簡単なくなるものじゃない。長い経験を経て、ようやく自分だけが持つ『隙』を自覚できるようになる。

そうすることでその隙に気を張り巡らせることが出来るようになる。初めて隙がなくなる。

それは並大抵なことでは手に入れられない感覚だ。

手に入れていることには今さら驚きはしないが、何故、そこまで隙をなくそうとしているのかが疑問に残った。

「……気にしても無駄か」

「何が無駄なんですか？」

「あつ、いや……何でもねえ」

無意識に呟いたのを真宵後輩に聞かれていたようだ。

とにかく、あいつが隙を見せないようにしていても俺には関係ない。考えても無駄なことだ。

「弁当じゃなくて、パンにするか。なんか、近づきにくいし」

「そうですね。では私はこの、ジャンボパフェを」

おいおい、なんでコンビニのデザートコーナーにそんなにデカイパフェなんて置かれてるんだ？

普通のファミレスとかで出そうな大きさだろ。

真宵後輩も目を輝かせて買えと催促してきている。

「はあ……」

ため息しか出てこない。

結局、俺の財布にはジャンボパフェを買うだけの金しか入っておらず、自分の朝飯は買えず終いになり、コンビニをあとにした。

あの女の子の視線を、背中に感じながら。

俺が教室に来ると、何故か異様な盛り上がりを見せていた。

いつもの騒がしさとはどことなく違う、いくなればそわそわした騒がしさでもいうところだろうか。

今から珍しいものでも見れるかのように、待ちきれないという気持ちしがひしひしと伝わってくるのが分かる。

こいつらはいったい何に盛り上がってるんだ？

「どうしたんだ？ 突っ立ってないで早く入れよ」

「柊か。お前、なんでこんな状況になってるか分かるか？」

「こんな状況？ …… なんか、そわそわしてるな」

教室に入った柊の言葉に「だよな」と同意して、自分の席につく。おそらく俺たちを除く全員が、このそわそわしてる原因を知っているのだろう。

それを知らない俺たちは、除け者にされてる感じが拭えない。

例えばそれを知っても俺たちは騒ぐようなタイプじゃないから、どうせ変わらないだろうけど。

それでも気になるという点では変わらない。

「おはよう。相変わらずかしぎと詩織は仲がいいな」

俺たちが席に座るのを見計らったように、今まで他の奴と話していた両希がやってきた。ていうか……。

「なんで毎朝同じ定型文で挨拶してくんだよ」

「それはお前らの仲がいいからさ。僕が見るとほとんど一緒にいるからな。こうなるのも仕方がないんだ」

何が仕方がないんだ、だ。俺と柊が一緒にいるからって毎朝、同じ言葉で挨拶してくんなよ。

「で、なんでこんなにそわそわしてんだ？」

「かしぎは知らないのか？」

「知らねえから訊いてんだろ。知ってたらわざわざ訊いたりしねえよ」

「それはそうだな。確かな情報ではないのだが『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』のひとりがある情報を掴んだんだ」

『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』って、ストーリーカー紛いなこともしてる団体だったはず。そんな団体が何の情報を掴んだんだろうか？

「今朝、金髪美少女が職員室に行くのを見かけたらしい」

「それって、転校生ってことか？ だからみんなそわそわしてるのか」

柊は両希の言葉でそわそわしてる原因を納得してしまったらしい。俺としては、疑問の残る解答だ。

中学までなら転校生が来るのはおかしな話ではないが、高校になつてから転校生が来るなんてかなり珍しい。

しかも進級してから一ヶ月も経っていない今の時期に転校してくるなんて不自然だ。

さらにコンビニで見かけた、私立桃園高校の制服を着た金髪の女。どうもそれらが無関係であるとは思えない。

「どうしたんだよ、冬道。難しい顔なんかしやがって」

「別に難しい顔なんてしてねえよ。ちよっと気になったことがあっただけだ」

あの金髪の女が隙を見せないようにしてなかったら、たかが転校生なんか気にならなかつたはずだ。

経験上からして、こういつた奴は面倒な出来事を持ち込んでくる。それがなんであるかは想像できないが、もしかしたら、面白いことになるかもしれない。

そう考えるだけで、今まで冷めきっていた何かが奮い立つような感覚が胸の内から沸き上がってくる。

「気になったって……金髪美少女のことをか？」

「なんでそんな変なとられ方しそうな言い方なんだよ……。他に言い様つてもんがあるだろ？」

「言い様なんてどうでもいいんだ。今は、お前が他の女に興味を持ったということが重要なんだ！」

「なんでいきなりそんなに熱くなってるんだ……」

拳を握り締めて、唐突に沸点を超えた両希は、二学年になってから一ヶ月も経っていないのに名物となりつつある『力説』を始めようとしていた。

こいつ、わけの分からないタイミングで叫ぶよな。

昔からそうだ。何かがあるとすぐに叫んで、皆の注目を集めてたっけ。

「お前が他の女に興味を持ったということは、我らが藍霧^{めがみ}真宵はお前の魔の手から解放されるんだ！」

魔の手ってなんだよ。俺の右手には何か魔的なものが宿ってたのか？ 疼いたりしてるのか？

そいつは驚きだ。俺も知らなかった。

「別に俺があいつに近づいてるわけじゃなくて、あいつの方から俺に近づいてきてるんだぜ？ そいつのは関係ないんじゃないの？」

「彼女も他の女を連れだした男になんか近づかないはずだ」

なるほど、そういうことね。お前はあいつの本性を知らないからそんなことが言えるし、ファンクラブなんかに入っただけなら俺は知ってるぞ。あいつの本性を。

気に入らない奴は正面から叩き潰す、欲しいものは略奪をしてでも手に入れる。魔女みたいな女だ。

お前らにそのことを伝えてやりたいものだ。

やったらやっただで後が怖いから絶対やらないけど。

「残念ながら、俺はそんなに軽くはねえ。親しくもない奴に興味なんか持たねえよ」

「でも気になったって言ったじゃないか。矛盾してるぞ？」

「そういう気になったじゃない。まあ……俺にも色々考えがあるんだよ」

まさか『戦い』の匂いがするから気になったなんて、こいつらに言えるはずがない。

本当にその匂いが『戦い』から漂うものなら、こいつらにそれを言ってしまうば、巻き込んでしまう可能性がある。

俺は自分のわがままで他人を巻き込むようなことはしない。絶対にしたくない。

「かしぎの考えはろくなことじゃないと思うがな」

「うっせえ。お前の怪しげな団体よりはマシだ」

「……怪しげな団体、だと？」

やべっ。なんだか変なスイッチ押しちまったかも。

こいつの真宵後輩に対するこだわり方って凄いらな。神を崇拝するような勢いだし。

『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』にとって真宵後輩は神みた
いな存在なのかもしれない。

それを崇める団体を馬鹿にされたんだから、黙ってられないって
ところか？

「その言葉は聞き捨てならんぞ。いくらお前に対する闇討ちを揉み
消したとしてもだ！」

「あつ、冬道の闇討ちの件って揉み消してくれたんだ」

そういえば闇討ちするみたいなお話があったな。

すっかり忘れてたけど、まさか両希が揉み消してくれたのか。

変なところで律儀だよな、両希って。

そんな両希は自分が言ってしまったことをようやく理解して、何
故か照れていた。

「お、お前のためじゃないぞ！ 確かに幼馴染みだが、そんなこと
よりもお前に怪我をさせたら、藍霧真宵が悲しむと思ったんだ！

それだけだからな！」

「はいはい、そうかよ。ありがとな、両希」

「……べ、別に礼なんか言われることはしていないさ。その言葉は
藍霧真宵にやるべきだ」

「お前がそう言うならそうしとくよ。幼馴染みだからな」

俺がそういうと両希は椅子に座り、そっぽを向いてしまった。

そんな反応を見て柊が笑いを堪えている。失礼な奴だな。

それからしばらくして、教室のドアが開かれた。

と、同時に、教室から感嘆の息が漏れる。

その原因は明確にして明らかだ。担任の後ろについて入ってきた、
ひとりの少女がそれを引き起こしたのだ。

「もう知ってる生徒もいるみたいだが、今日は転校生を紹介する」

もはや決まり文句となりつつあるセリフを受けた少女は、一歩だ
け前が出る。

たったそれだけの動作にも関わらず、どことなく気品を感じる。

とてもじゃないが、朝、コンビニで弁当とにらめっこをしてたと

は思えなかった。

「アウル」ウイリアムズです。母の都合で今日からここに通うことになりました。よろしくお願いします」

凜とした口調で、アウル「ウイリアムズはアメリカから来たとは思えない、悠長な日本語で言った。

改めて見てみると、確かに日本人とは作りが違う。

染めたのではない純粋な金髪に、目付きの鋭い碧の瞳。女性からすれば高めの身長にスラッとしたモデル体型。

異性だけでなく、同姓をも虜にしまいそうな顔立ちは、どことなく冷たさを感じさせるものがある。

そして、相変わらず隙を見せないようにしている。

俺と一瞬だけ目が合うが、何事もなかったように外される。

そういえば、朝は俺が見つけただけであっちは見られてないんだっけ。それじゃ、分かるわけないか。

「アウルの席は、一番奥だ」

担任の言葉に一回だけ頷き、廊下側の一番後ろの席に腰をおろした。

残念ながら俺の席からしたら反対側になってしまった。

周りに空いてる席がなくて、あそこしか空いてなかったんだから仕方ないといえば仕方ない。

席についたアウルを見るが、下らなそうにクラスを見つめている。やっぱり、あいつは面白いことを運んでくれてくれそうだな。

俺は人知れず口元を歪ませながら、担任の話すアウルの転校してきた経緯を聞き流した。

転校生の宿命というべきか、担任の話が終わった直後にアウルの席に生徒が一齐に群がっていた。

その群がりようは餌を見つけたハイエナの如し。

転校生が来たからって、実際にこんな風に群がるなんて思わなかった。これでまたひとつ、無駄な知識で頭が埋まったような気がする。

ちなみに俺や両希、柊はそこにいない。

教室の窓側、つまりは世界から切り離されたかのように寂しい空間にて、鬱陶しそうにしながらも律儀に質問に答えているアウルを見ていた。

「あんなに群がって、迷惑だとか思わねえのか？ あいつら」

「気になるものは仕方ないんじゃないか？ 転校生が外国人で美少女なんてまず有り得ない。だから、少しでも話しておきたいんだろ」

どうせすぐに興味がなくなる……いや、真宵後輩にファンクラブなんてのが出来るくらいだから、あいつにもファンクラブが結成したとしても不思議じゃないな。

「……なあ、冬道。なんで両希の奴、あんなに怒ってんだよ。お前なんかしたんじゃないのか？」

「俺のせいじゃねえだろうよ」

柊の言う通り、隣では両希がお怒りの様子だった。

もちろん理由は分かっている。

『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』に所属している奴らが、アウルのところに行ってしまったからだ。

同胞としては、見過ごせない事態なんだろう。

「全くあいつらと来たら……。『藍霧真宵ファンクラブ兼精鋭部隊』に属しているくせに他の女に鼻の下を伸ばすとは……」

俺的には、ロリの部類に当てはまる真宵後輩に鼻の下を伸ばしての方が、よっぽど怒られそうなことだと思う。

犯罪にだけは走らないようにしてくれよ？ ……違うな。真宵後輩に犯罪に走らせるような行為をしないようにしてくれよだな。

真宵後輩なら本当にやりかねん。躊躇がないからなあ。

あっちにいたときに俺も本気で殺されそうに以下省略。

「そっいうお前は行かないのか？ 別に行っても問題ないんじゃないね

えの？」

「行かない。僕は金髪より黒髪の方が好きなんだ」

「真宵後輩みたいなの？」

「おう」

一切の迷いなく、言い切りやがった。真宵後輩のことだけに。：
…上手くねえな。

なんで真宵後輩にそこまでこだわることかを知りたいとは思わないが、少しくらい他の女に興味を持って罰はあたらんだろうに。

「お前こそ行かないのか？ 興味あるみたいなのを言っただが」

「行かねえ。あんな人混みの中に突っ込む勇気と根性は、小学生のうちにはサントがいるっていう夢と一緒に捨ててきたよ」

「ずいぶんと昔に捨てたんだな……」

捨てた云々は適当だが、俺は単に人混みが嫌いなんだ。時間が経てば話せるようになるのに、わざわざ行く必要はないだろ。

「だいたい、今すぐに話したいこともないし。」

柊も同じような理由で行かなかったんだろう。俺の言葉に頷いて同意している。

「それに、ああいうタイプは騒がしいのを嫌うタイプだ。少しでもそつとしてやった方がよくないか？」

「ホントにちよつとだけだな」

そこはツツコンじゃいけないところだ、柊。その小さな積み重ねが、大きな成果となるんだ。塵も積もれば山となるって言うだろ。

「つーか、転校初日の初っぱなから体育ってなんだよ。嫌がらせか？」

「そういう時間割りなんだから仕方ねえだろ。文句言っつな、冬道」
「いや、俺は文句なんてねえけど」

でも、もし俺が同じ立場だったら嫌だな。

ストレッチとか二人一組でやるようなことがあつたら余りそうだし……って、あの人気じゃそれはないか。逆に引っ張りだこだな。

「今日は男女合同体育だったか？」

「おう。だからあたし達も着替えたんじゃねえか」

今の今まで言っただけだったが、俺たちは体操服で会話をしている。半袖短パン。絶滅危惧種であるブルマも校則では穿いていいことになってるが、自分から好んで履く奴はいない。

そういえば一回も見たことないな、ブルマ。

「柊はブルマ穿かねえの？」

「バカ言うんじゃない。誰がブルマなんて穿くかよ」

ですよー。自分から穿きたがる女子なんているはずがないですよー。

隣では真宵後輩のブルマ姿を妄想して悶絶しそうな変態がいるが、気にしない。俺の視界にはそんな奴は映ってない。

「今の時代にブルマがある意味が分んねえ」

「体操服を忘れたときの保険だろ？ 男共に変な目で見られなくなかったら、忘れてくんなくてことなんじゃねえの？」

「誰もあたしのブルマなんて見たくねえだろ」

「そうでもねえよ」

真宵後輩やアウルと違ってまた、柊も美少女の部類に入る。

あの二人は遠い、高嶺の花みたいな空気を無意識に放出してるが柊は身近にあり、それでいて美しく馴染みやすいって感じた。

言い方は悪いけど手頃な美少女ってところだ。

「少なくとも俺は見てみたい」

「はあ？ なんであたしのブルマ姿なんて見たいんだ？」

「そりゃ、お前は美人だし可愛いから……あ」

なんて恥ずかしいことを暴露してんだ、俺は。無駄に話しやすいから本音まで出しちゃったよ。

しかし言われた柊はというと、きょとんとしていた。

「面白いこというな、冬道って。今年一番の面白さだぜ」

「本当のことなんだが……」

「あたしが美人なら、世間には美人が溢れかえってるよ」

こいつ、典型的な自分の容姿が優れてるのがわからない奴だ。し

かも極度の。

自分の容姿を自覚して高飛車そうにしてるよりは大分マシだが、これはこれで質が悪い。

美人に後ろから抱きつかれたりしたら、自分に好意があるんじゃないかと期待してしまふ。もしそれで玉碎したときのショックは、もはや計り知れない。

「そろそろ時間になるし、早く行こうぜ？ 遅れるとうるさいから」「そうだな。おら、悶えてねえで行くぞ」

未だに悶えている両希の腕を掴み、俺は引きずるようにして教室を出る。

もうアウルに質問してた奴らやアウルは体育館に向かったみたいで、教室には俺たちしか残っていなかった。

どうやら思っていた以上に話し込んでいたみたいで、俺たちは駆け足で体育館に向かう。

そんななか、柊が「そういえば」と何かを思い出したように呟いた。

「朝のニュース見たか？ 昨日で五人目だつてよ」

「見てないから分からん。今日はそんな暇はなかったし」

「今に始まったニュースでもねえけどな。あれだ、通り魔の無差別な負傷事件」

負傷？ 殺人じゃなくて？

「手口が一緒だから同じなんだろうけど、何やったらあんな風になるんだろうな」

「どうなつてたんだ？」

「全身が切り刻まれてたんだ。刃物とかじゃなくて、なんか糸みたいな奴でな」

全身が、切り刻まれてた？ なのに死んでないから殺人事件じゃなくて、負傷事件に止まつてるということか。

「有り得ないよなあ。なんでそんなことになるんだ？ あっち側からしたらやるのも面倒だろうし」

そう、有り得ないんだ。

それだけの怪我を負いながらも死なないこともおかしいが、そんな現象を引き起こる状況がそもそもその前提として有り得ない。

どうしてそんなことが出来る。何をすればそれが出来る。

時間を掛ければ不可能ではない。だが、これは短期間のうちに別々の場所で複数回起こっている。

つまりはこれを人間の手でやることは不可能なのだ。

人間ならば。

「冬道はどう思う？」

「……さあな。こんなことが出来るのは、化物くらいのもんだ」

「化物なんているはずないだろ」

「いや、そうでもない……」

俺は化物を知っている。二人……いや、少なくとも俺は、人間じゃない。

「こんな話は終わりだ。俺たちの柄じゃねえ」

「……それもそうか。よおし！ なら、今日こそ決着つけようぜ！」

それはなるべくなら遠慮したいんだが……無理だろうな。

体育館に入り、教師の前に整列している列に混ざる。

「よし、よしよし。全員来てるな？」

気の抜けるような、明らかにやる気なく言葉を発したのは体育教師の夜篠司先生。

いつも眠たそうな目をしており、見てるだけで気だるそうな気持ちに移りそうだ。それだというのに彼女の容姿は十人が見れば十人が振り向くような、そんな容姿だ。いわゆる美人。

ジャージの胸囲は司先生の持つ豊満なそれのおかげで、はち切れそうになっている。

長い茶髪は肩から流すようにまとめられ、その人が放つ雰囲気は妖艶すぎる。

正直、健全な高校生に大しては威力が絶大すぎる。

そんな司先生だが、授業の集合時間に異常なこだわりを見せてい

る。

「今日もご苦労。お前らが遅れると私が怒られるからな。あとは好きにしていいぞー」

これが理由だ。自分が怒られたくないがために、生徒には時間きつちに集合させたがるのだ。

だというのに集合したあとは適当という、教師らしくない教師だ。で、毎回毎回こんな感じに授業が進むため、内容は俺たちが勝手に考えることになる。

「今日もドッジボールみたいだぞ、かしぎ」

「またドッジボールかよ……」

いつの間にか復活した両希の言葉を聞いて、俺はため息混じりの言葉を吐く。

別にドッジボールが嫌いなわけじゃない。俺だってドッジボールは好きだし、高校生になった今でもやりたいときはある。

しかしそれが毎回だと、嫌にもなってくる。

何が悲しくて毎回ドッジボールをやらないといけないんだ。

そして、ドッジボールをやるということは柊がやる気になるってことだ。

「冬道！ 勝負だ！」

「俺、外野行くわ」

「無視するなーっ！」

ドッジボールのチームは男女混合で適当に振り分けられる。チームは固定されてるから俺と両希は一緒に、柊は敵チームになっている。

だからこうやって、柊は俺と勝負したがるんだよな。

「俺とお前が勝負したら決着つかねえだろ。どっちも負ける気はねえんだから」

一番最初に柊の勝負に乗ってやったんだが、授業中に終わらなかった。他の奴らは開始五分で全滅したのにずっと見てるのなんかつまらなすぎる。

何回かに一回だけやるだけで、連続ではやらない。やりたくない。

「えー、それじゃ、あたしがつまんないじゃんかよー」

「個人より集団だ。ひとりのわがままに付き合えるか」

まだ何か言ってるみたいだけど、俺には何も聞こえない。

俺はいつも通り外野の位置にやって来て、内野でやってるボールの投げ合い取り合いを傍観する。

(それにしても……)

さっきの柵の話が本当なら、こっちの世界にも普通じゃない何かがあるということになる。

人体が糸みたいに細いもので、全身を切り刻まれるなんていうことは普通なら絶対に有り得ないんだ。

人間ではなく、化物なら話は変わってくる。

もう化物は常識や普通の範囲内では捉えること自体が間違ってる。

怪異、異常……そんな言葉で表すくらいがちょうどいい。

それに気づくことが出来るのは、ほんの少しの普通と、同じ異常を持った化物くらいのもんだ。

もちろん、それに気付いた俺も普通じゃないんだろう。そんなことは、異世界に召喚されて魔王と戦ったことで分かっていたことだ。

『冬道かしぎ』という人物の『普通』というのは、もう既にこの世界でいう『異常』ということに違いない。

それはつまり、俺は化物であるということなんだ。

だから俺にも同じようなことをやる事が出来る。むしろ、それ以上のことを呼吸をするのに等しくやる事が出来る。

やりはしないが、そんなことが出来ると知ったときの皆の反応はどうだろうか。

決まっている。恐怖し、畏怖の対象として見られることになる。

普通の中の異常というのは、そういうものなんだ。

「冬道くん！ 前！」

「あ？」

同じクラスの女子

名前なんていうんだっけ？

から叫ばれ

て思考の海から帰って前を見ると、白い球体が視界いっぱい広がっていた。

確か今、ドッジボールしてる。それに使ってたボールは白だったはずだ。ならこの白は、ボールってことか　　以上、〇・一秒での考察。

俺はそれに大して慌てるわけでもなく、ただ平然と片手でそれを受け止め、ボールから投げた張本人に視線を変える。

「ちっ、もうちょっとだったのにな」

「……柊。お前、そんなに俺と勝負してえのか？」

投球を終えた姿勢で舌打ちをする柊に、俺は自分でも驚くくらいに低い声で言った。

なんで投げる方向と真逆にいる俺に投げてんだ。しかも全力で。

「当たり前じゃん。だからわざとお前の顔面に向かって投げたんだぜ？」

「……いいだろう。ならば、戦争だ！」

周りでまた始まったよみたいな空気を出してるが、この際そんなことをいちいち気にする気はない。

ゴムボールを変形するくらい力をいれて掴み、振りかぶる。

肩から肘、手首、指の関節へと力を徐々に伝達していき、指先に触れた瞬間に腕を一気に振り抜く。全力ではない、手加減した本気の一球は直線の軌道で柊に向かっていく。

さすがに女子の顔を狙うわけにはいかないから、比較的キャッチしやすい胸の辺りに狙いは定めている。

空気を切るように進むボールをキャッチするかと思えば、柊はギリギリのところまで体を逸らし、避けていた。

誰しもが柊がキャッチすると思っていたのだろう。

ボールを避けた柊を見て慌てて軌道から逃げていた。

だが幸か不幸か、軌道上には反対側の外野である外国人転校生のアウルの姿があった。

見ていれば状況も変わってただろうが、アウルは考え事でもして

るのか、ボールを全く見ていない。

「避ける！ アウル！」

なんで話してもないアウルを呼び捨てにしてるんだ、などというあまりにも場違いな考えを抱きながら、アウルが避けられることを期待する。

アウルは身長がそこまで高い方じゃない。柊の胸の辺りはあいつにとつては顔面コースだ。

もし当たったりなんかしたら保健室行きは確定だ。

まあ。

当たれば、だけどな。

平手打ちでも喰らったような、そんな音が体育館に響く。

クラスの連中はそれを見て啞然としていた。

俺が投げたボールを、アウルは避けることは出来なかった。この場合なら避けなかったと言った方が正しいだろう。

アウルはボールに見向きもせず、片手で俺が投げたボールを掴んでいた。

そんなものは避けるにも値にしない。まるで無言でそう告げるような行動だった。

「す、スゲー！」

誰がそう言ったか。それすらも分からないままに歓声が上がリ、アウルを取り囲む。

異彩の色を放つ金髪美少女、一瞬にして注目の的になる。

「スゲーな、あいつ。冬道のボールを片手でとるなんて」

いつの間にか近づいてきていた柊が、本当に感心したように呟く。俺は別にそれに驚くことはしない。あれだけ警戒を高めて隙を見せないようにしてるんだっつたら、あれくらいは出来て当然だ。

囲まれているアウルもそれくらいで騒ぐなと言いたげな表情だ。

そんなアウルを見て、俺は確信する。

（この負傷事件は、間違いなくあいつが絡んでる。面白くなってきた……）

異常な警戒を見せる金髪美少女と、異常な事態を引き起こしたこの事件。この二つの関係性はもう切れない。

あいつがここに転校してきたのも、ここ周辺で事件が起これと分かったからに違いない。

アウル「ウィリアムズ。あいつについていけば、面白いことに辿り着ける。」

俺の、化物としての異常性がそれを本能で感じ取っていた。

「なんか楽しそうじゃん。いい顔してるぜ？」

「ああ。これから楽しくなりそうだ」

頬が緩んでいることを自覚しつつ、柊にそう言う。

さて、久しぶりに面白くなってきたな。

1 4 「転校生」(後書き)

次回予告

「黒髪美少女……。つまり先輩は私のことが好き、ということですか」

「心にもないことを言うな」

「否定はしません。私も、興味はありますから」

「この世界には、どういった力がある」

「俺は私立桃園高校二年、冬道かしぎだ」

「私はアウル＝ウィリアムズだ。よろしく……。…というのもおかしいか」

「水色の縞パンか。まあ、似合ってるんじゃないかね？」

「貴様、何者だ」

次回

1 5 「接触」

「言っただろ？ 元勇者だって」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9097z/>

氷天の波導騎士

2012年1月6日10時48分発行